

退職にあたって

廣野行雄

高校生になりたてのころ、今ではほとんどその名を目にすることのない K.K という文芸評論家の本を読んだ。書名すら覚えていないくらいだから、何が書かれていたかまったく思い出せない。ただ、人生とは邂逅の謂である、といった意味の文句があったことだけ、どういうわけか頭に残っている。読んだ当初は、まったくピンとこなかったこの言葉が、鷗外を気どるのではないが、人生の「中仕切り」を迎えたいま漸く切実なものになって甦ってくる。私のような平凡な人生にも、やはりそれなりの邂逅はあったわけで、本来なら幾人もの人をあげなくてはならないはずだが、この人と出会わなければまったく別の人生を歩んでいたに違いないと思われる人がふたりいる。

一人は、四歳上の姉だ。学校から帰れば、カバンをほうり出して日が暮れるまで野球のボールを追いかけることしか知らなかった私に、読書の楽しみを教えてくれたのは、この姉である。彼女には、私をある方向に導こうなどというごさかしい計算はてんからなく、ただ弟を自分が楽しんでいる読書の世界の仲間に入れてやりたいという母性愛に似た思いからだっただけに違いない。おかげでいろいろな作家や本を、読むべくして読んだように錯覚させてもらった。とりわけ有難かったのはドストエフスキーを読んだことである。その後今日まで、その作品中の人物や出来事を実生活のうえでなぞるのが習いとなった。それだけではない。彼女は、中国の文革中、私の生まれ育った北陸の海辺の小さな町で恐らくは唯一の「人民中国」や「中国画報」の定期購読者だった。つまり、私に現代中国へと目を向けさせてくれたのもまた彼女であったということになる。

感傷的な身内話は聞き苦しいと固より承知しているが、もう一年以上病床に横たわったままの彼女のことを考えると酸鼻の思いをどうしようもない。

もう一人は、学部時代の恩師 M. A 先生である。

私が大学の語学教師として半生を送ることになったのはまったく先生と出会ったからに他ならない。それはたんに先生が就職の世話をしてくださったというだけの話ではない。元来地道な努力を要する語学という学科が好きでも得意でもなかった私が、M先生に出会ってから語学観が一変したのである。文学というものが言葉によってなりたっているということに今さらのように気づき、言葉が人間という存在にとって本質的な意味をもつことも知った。それよりも何よりも、生まれて初めて、ものを学ぶということの面白さに気づいたというべきかもしれない。この歳になっても、もう一度あの日のあの場所に帰りたと思うのは、魯迅の小説を読む、先生の言語学演習の授業であり、言葉の勉強を根底からやり直したいと押しかけた H 大学の先生の研究室である。とはいえ、旧制中学四年修了で一高に入るような秀才中の秀才であり、学生時代を知る人々に等しくその学問的、思想的な先鋭さを賛嘆される人の教え子としては、私はまちがいに不肖の弟子である。先生から受けた学恩に何ら報いるところがなかったし、語学教師としての私はひたすら「述べて作らず」を実行してきたに過ぎない。

さて、こうしてみると、先程からしきりに「私」といつている廣野某なる「私」などは、まったく有って無きが如きものであり、チエホフ—彼もまた姉が教えてくれた一の『可愛い女』とは、何のことはない他ならぬ自分のことだったということになる。

さて、本学を去るにあたって格別の感慨とてないが、このごろ時々頭に浮かぶのは、『平家物語』にある新中納言知盛の「見るべきほどのことは見つ」という言葉である。じつはこれもまた M 先生が、紛争校ゆえにお上のお取りつぶしにあった私の出身大学を去られるにあたって、この言葉を口にされたことを想い出しているだけの話なのではあるが。